

過去、現在、未来の光

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

紀伊半島の東側全体を占める三重県は、当然ながら縦に長く、半ばあたりでぶつくり、さらに東へ突き出た半島に、伊勢、鳥羽、志摩の各市がある。このあたりには、こどものころ家族で来たし、ひとひが生まれる前後も安産祈願とお礼参りのために一家で来た。

ひとがいちばんたくさん住んでいるのは四日市市。この地名は、昔、小児ぜんそく持ちだった僕には、おそろしいイメージしかなかった。もくもくと立ちのぼる煙、黒煙を吸って喉をかきむしり悶え苦しむこともたち。けれども、おとなになってから訪ね、もはやそんな煙を吐き出すプラントなどないこと、さらに、この町に世界最高のこどもの本屋「メリーゴランド」があることを知った。ひとがたくさん住む場所には、ひとがそこに住みつきたくなる理由がいくつもあるものだ。

三重県庁のある津市を訪れるのは、この五ふたりのなかの真摯さ、ユーモア、たのしんで生きるきもちが、絵本のページに反射して、読み手のなかに、鏡像のように映る。tupera tuperera は、ただ絵本作家であるだけでなく、彼らにしかできない新しい「表現」を求め、ひとつひとつ実現していく、超一級の美術家なのだ。

津市の小学校一年生だった「亀山くん」の描いた一枚の絵が展示されてあった。描いている途中、画用紙に水をこぼしてしまい、拭き取ろうとしたら絵の具が流れ、画面がだんだら模様になった。ところがこの一枚が市に表彰され、「亀山くん」は油絵を習いにいこうとおもった。偶発性に支配されすぎないアドリブの妙は、この最初の作品から一貫していて、どんなことでもやっぱり「一発目」に全部はいつてるな、と納得した。

その午後、榊原温泉へ。枕草子に「湯はななくりの湯、有馬の湯、玉造の湯」と紹介された、そのななくりこそこの地だ。海辺を離れ、山間の村にはいっていく。僕は山に、緑に、空に見入った。あまりにも透明だったから。そのうち、自分が見入っているのが景色でなく、空気であることに気づいた。

月がはじめてのはずだった。が、いつか遠い昔、やってきたような、ないような、淡い記憶をもっている。津、という日本一みじかい地名は、普遍的な海の記憶をよびますのかもしれない。

県庁だけでなく、博物館、大学など、文化的な施設はこの津市に多い。そのうちのひとつ、三重県立美術館を訪ねたのは、「ぼくとわたしとみんなのtupera tuperera 絵本の世界展」を見学するためだ。京都の三条通から大津へ。高速道路に乗っておよそ二時間。津の町に着いて国道を走ると、県外ナンパのほぼすべてのクルマが、ぼくたちと同じ交差点を、同じ方向に曲がる。みな、同じ場所、県立美術館をめざしていく。

美術館に着くと、tupera tuperera のふたりが出迎えてくれた。亀山達矢さんは、この津市出身。奥さんの中川敦子さんは京都

三重の津の、この山中の空気は、希有だ。人為をこぼまず、穏やかに迎え入れ、つつみこむ。野山を通る舗装路を、軽くアップダウンしながら、ぼくはあの「淡い記憶」を思いだしていた。三重の光は、空から射し、海から照り返し、風景を浮かびあがらせるように思うけれど、それだけではない。いま、昔、未来の光が、記憶を鏡面のようにつかって、僕の内側で錯綜する。いま、目の前にある。なのに「なつかしい」。一重、二重、三重に、内側で重なり合っていく、透明な光。

榊原温泉のお湯はすばらしかった。伊勢神宮の、内宮の帳を舞いあげる風のように、波打って流れた。それは、三重の地の海、山、

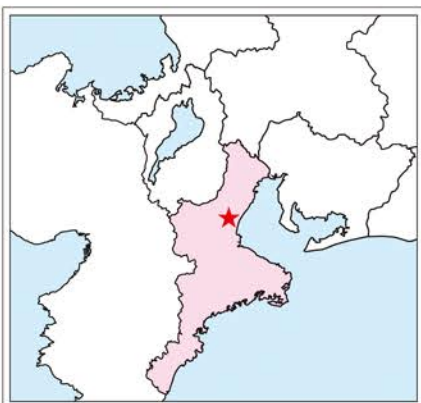
出身。「しろくまのパンツ」「パンダ銭湯」「わくせいキャベジ動物図鑑」などで知られる、いまいちばん人気のある絵本作家ユニットだ。

ふたりとこのこどもたち三人は、去年、京都のうちの近所に越してきた。仕事をこえて家族ぐるみでつきあいがある。七歳の息子ひとひが、みずからの鴨川ランニングコースの北の終点と、勝手に決めていた。おとなにはかなわない持久力で北山大橋をこえ、tupera tuperera 家にたどりつくと、なだれ込むように人さし指をのぼし、ドアベルのボタンを押しこんでピンポーンと鳴らす。

県立美術館での展示は、原画展以上のものだった。tupera tuperera の作品は、どれもページをめくると自体のたのしみに満ちあふれているが、それは、一枚いちまいのページをこんな精緻に、ていねいに、そしてたのしそくに、ふたりが描いているからだ。

町の空気さえも、同じことだった。そして、tupera tuperera の作品に流れる、時間の透明さにも通じている。人為をこぼまず、穏やかに迎え入れ、そしてつつむ。

平安時代、それ以前からひとを集め、ひとを育んできた土地。そうした場所には、ひとがそこを集めてやまない理由が、いくつもあ



三重県

面積：5,774.41km²(境界未定部分あり)
総人口：1,798,886人(推計人口2017年10月1日)
人口密度：312人/km²
県の木：神宮杉
県の花：ハナショウブ
県の鳥：シロチドリ

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。
著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない!」「遠い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

